

杉村楚人冠読書案内

生涯学習センターアビスタ内の我孫子市民図書館では、以下の杉村楚人冠の著作を読むことができます。今では古本でしか入手できない楚人冠の著作ですが、図書館では気軽に読むことができます。多くの読者に支持された楚人冠の文章を味わってください。

※貸出不可の本は、図書館内で閲覧できます。

※貴重書を読むにはカウンターへの申し込みが必要です。

『湖畔吟』

※ 1985 年の再刊本。

楚人冠が我孫子に定住した 1924 年から『アサヒグラフ』に連載していた随筆「湖畔吟」は、当時の我孫子の風情を全国に発信した、楚人冠の代表的エッセイです。その 3 冊の単行本『湖畔吟』『続湖畔吟』『続々湖畔吟』をまとめた『楚人冠全集 第五巻 湖畔吟』を戦後復刊した本です。

『続湖畔吟』

『続々湖畔吟』

随筆「湖畔吟」シリーズは再刊本や、『楚人冠全集』でも読むことができますが、当時の我孫子、手賀沼の写真は発刊当初の単行本にしか収録されていません。昔の我孫子の写真を見たい方はこちらをどうぞ。

『最近新聞紙学 付 本所から』

※ 1982 年の再刊本。

大学での新聞紙学の講義を元に 1915 年に出版され、「新聞記者の教科書」として高く評価された『最近新聞紙学』を中央大学出版部が再刊した本です。楚人冠の新聞人としての実力を発揮した一冊

です。さらに、短編小説「本所から」も収録。赤穂浪士の討ち入りが、もし大正時代に起きたら、新聞記者達はどう動くのか……。人目をひく突飛な設定のなかに、新聞編集の雰囲気伝わってくる作品です。

『白馬城』 貸出不可（貴重書）

楚人冠が我孫子の別荘に付けた「白馬城」という名を与えた随筆集。我孫子に別荘を構える経緯や、別荘暮らしの様子などが書かれています。

さらに、冤罪で医師免許を取り上げられた医者の話や、不幸な境遇に負けず生きる新橋の芸者の話など、楚人冠が弱者に向けた視線が伝わる随筆を収録。

『へちまのかは』 貸出不可（貴重書）

楚人冠が東京朝日新聞社に入社する前後の随筆や論説を収め、若い頃の楚人冠の文章を読むことができる単行本。円覚寺での座禅の体験を記した「雲水行住」や、当時まだ見たことのある人が少なかったペンギンを紹介して愛読された「ペンギン」などを収録。

『大英游記半球周遊』 貸出不可（貴重書）

もともと外電の翻訳や外国人の取材・応対を主な仕事として東京朝日新聞社に入社した楚人冠を一躍人気記者に押し上げたイギリス特派の取材記『大英游記』と、楚人冠の企画した日本初の民間人を対象とした世界一周旅行の紀行文を収めた『半球周遊』を縮刷合本にした一冊。

現地の人々との交流を、楚人冠のユーモア溢れる筆で楽しむことができます。

『楚人冠全集』第一巻～第十八巻 貸出不可

全集の名の通り、楚人冠のあらゆる作品を網羅した全十八巻のシリーズです。

楚人冠のルポを読むなら、第三巻の「戦に使して」や第十四巻「新聞記事回顧」。「戦に使して」は第一次世界大戦の取材に特派されたときの記録。戦争に直面したヨーロッパの様子を伝えています。

「新聞記事回顧」には、楚人冠が書いてきた代表的な新聞記事をルポ、インタビュー、社説など広い範囲からまとめています。楚人冠にとって初めてのルポルタージュで、東北地方の飢饉を自分の足で取材して窮状を訴え、今なお高く評価される「雪の凶作地」も収録されています。

紀行文を楽しむなら、第三巻の「越後記」「ひとみの旅」や、第十巻の「と見かう見」。風景を記録するよりも、人とのふれあい、その土地の暮らしに関心を払った楚人冠らしい紀行文です。紀行文といっても、新潟の油田、静岡県富士の製紙業、御料牧場から払い下げられて畜産に取り組む福島県の岩瀬牧場など各地の産業も視察し、日本に初めて伝えられたスキーを取材するなど、あくまで新聞記者らしい視点から書かれており、近代日本の歴史の記録としても読むことができます。

ちなみに、岩瀬牧場を取材した「牧場の一夜」の一節「牧場の暁」が、文部省唱歌「牧場の朝」が杉村楚人冠と推定される根拠となりました。

第六巻の「うるさき人々」「旋風」は楚人冠としては珍しい小説。「うるさき人々」は楚人冠唯一の長編小説で、『東京朝日新聞』に連載され舞台化される程の人気を博しました。楚人冠が関心を持っていた土地制度（小作問題）を時代背景に、仏教的な人間観を織り込みながら、ストーリーをまとめ上げています。

「旋風」はプロの小説家ではない人々がリレー形式で一編の長編小説を完成させるという、一風変わった作品。楚人冠はその第一話と最終話を担当しました。民俗学者の柳田国男や俳人の笹川臨風も執筆に参加しています。リレー形式ならではの、時に突飛な展開を見せるストーリーが楽しめます。

皮肉を交えた文章を得意とした楚人冠がその真価を發揮したのがコラムでした。第九巻「今日の問題」では、当時『東京朝日新聞』の夕刊に連載されたコラムを読むことができます。その日の朝刊に出た記事を題材に夕刊に掲載したもので、楚人冠の機知が存分に發揮されています。新聞掲載時のまま、タイトルの付いていないごく短い文なので、当時の政治勢力や社会情勢など、歴史の知識がないとわかりづらい部分もありますが、文字通り簡明直截な文章は今でも十分に楽しめます。

第十一巻、第十六巻、第十七巻に掲載された「山中説法」は『週刊朝日』連載のコラム。こちらは時事問題に限らず、色々な話題に楚人冠が皮肉を投げかけています。

また、コラムとともに人気のあった楚人冠の随筆は、さすがに質・量ともに充実しており、第四巻「蟲のみどころ」、第十巻「かにかくに」、第十二巻「新選文」、第十六巻「十三年集」、第十七巻「軽篇 重篇」、第十八巻「林中放送」と多くの巻で楽しむことができます。「人間楚人冠そのものが随筆になりきっている」と評された、日常生活の何気ない話題を、皮肉とともに面白く読ませる文章が魅力です。

少し変わり種は、第七巻の「濱口梧陵伝」と第十五巻の「肺病全快談」。「濱口梧陵伝」は南海地震の大津波から村人を救ったことで、楚人冠の故郷和歌山の偉人として伝えられていた濱口梧陵(儀兵衛)の伝記を楚人冠が編纂したもの。「肺病全快談」は、自分自身も肺

尖カタルという病気を克服した楚人冠が、肺病を乗り越えた人々にその経験談や治療法をインタビューしてまとめたもの。当時最も恐れられた病気ともいえる肺病を治療した話を集めて、肺病は治せると訴えようとした作品です。

楚人冠の新聞論を読むには第八巻「新聞の話」「新聞紙の内外」と、第十三巻「新聞視角」「最近新聞紙学」。当時の新聞事情を知ることができると同時に、今のマスコミや世相にも通じる課題が当時から議論されていることに、驚きを覚えるでしょう。また、楚人冠が日本で初めて設けた調査部と記事審査部について、楚人冠本人の筆で解説されているのも貴重な文章です。メディア史、マスメディア論に興味のある方は必読です。



我孫子市民図書館アビスタ本館 まちづくり・郷土コーナー

杉村楚人冠読書案内

平成 24 年 6 月 8 日発行

我孫子市杉村楚人冠記念館

〒 270-1153 我孫子市緑 2-5-5

TEL 04-7182-8578

我孫子市民図書館アビスタ本館

〒 270-1147 我孫子市若松 26-4

TEL 04-7184-1110